重修真書太閤記

六編 九

~13
459
59

へ13 特
門 ＊＊
號 459
巻 59

消 福 新

重修眞書太閤記六編巻之廿五

嶋左近奇謀全勝の事

并溝尾庄兵衛郡山へ来る事

諸侯爭臣五人あれハ無道といへとも其國をうしなふ大夫爭臣三人あるハ無道といへとも其家をうしなふ父爭子あれハ身不義ニおちいらさるとかや父子ハ親しき極ミなれとも年をてふ長してハ父も子を隔て子も父をいふをくおもふすりわたミる心を置合て大方のことを父も子ふいふとをく子も父ふ知をけるより終ニ他人のそしりを受るためしいたるためしいそんや君臣ハ元よりう

同 攻 會 印

ときものふして親しこハ薄けれともたく恩の厚きう故
ゑ百年の命を棄る事をやをくるとも其面をくかしく
いさめを容る人まれゑまた其諫をいるる人をくふしさ
ふを島松倉の兩家老主のさえかり親しこよれる明智也
今ゑさ鬼神をもうひちきりへき織田殿父子を討て勢
龍の雲ゑのり猛くいさめるゑ虎の風ゑ從ふとき光秀う
事を遂得ま〳〵きとをさとうちきりに諫めて和泉紀伊の
二國を冨うとせは毛利の大敵と戰ゑ勝敗の機いまた決
しかたき羽柴筑前守のかふらにかりへきを謀知ける心
の底のかくこをはたやをく誰も見かく称をおしきうて
諫を入るゝものもふき処ゑかく手強くいさめしハ實ゑ

戰場の一番錦ようまたふしかたき処ありさふと老功の
古兵ふれとも推舉の力と授與の恩といつれうまちをい
つ從ふおとるゑ云慮を既ゑふこまとひあやまたは千里
のたかひとふるへかりしを中西只一人たやをくこれを
決防をしをまたく少年の意ふあらにひとへゑ春日大明
神の示現ふらめといえれしを眞ふ筒井の家のふえし動
のぬかためとは後ゑ誰も知うんふれ順慶年ふを若き人
なう日頃光秀う弓矢のとりやうをハ見馴聞ふれたりか
ふらに勝んとおもへるもまた誤と云へからに國を近江
丹波をあえせ得て虎の如く龍の如くまた熊の如く羆の
とき侍おかく旄下ゑ列を引其身清和院天皇の嫡流美濃

源氏の總領ふり志かのこゝろに朝廷より將軍ふ補しゑへハ旗を京都ふひゝかせて天下を知へき人ゑこれあらんとおもひしも更ふ僻ゑてふゑへからにまゝ和泉ふ紀伊國あゑをてハ五十四万石の地ゑり大和と共ふゑをてふ百万石筒井の繁昌此時と上中下おしふへゝよろこひたのしゝ早く件の國くを切取て我身の榮華ハ云ふ及ゑに子孫のための謀ゑをゑやせましかくやをはしとあらましよゝくおもへる処ゑり又うちかへし織田殿の子息の体をゑかり見るふ二男信雄ゑ尾州清洲の城主として百餘万石を領しゑへと其うまれ付柔弱ふて決斷ふく其家老星崎長門守氣隨の田舎侍ゑれゑ天下を治むる器と

いふへからにハ三男信孝ハ濃州岐阜の城主五十餘万石の力ゑあれとも智畧ゑかしくいつれもく明智ふ向ひゝく勝敗を爭ふへゝ魂ふしまた三法師丸ゑ嫡孫といへともいまゝ幼冲ふしたれゝゑその下知ふ就ゝ天下を爭ふへき柴田修理進ゑ自身の勇ふふこうていつもく真先をかくふを以ゝ心とに去ハ人の武きを妒ゝ人の功をさゑにかくゝハ多くの大名を進退して四海泰平の政を施ゑへき器量ゑしゝ離川左近丹羽五郎左いつれも意小ふして識量ゑく能し人の下ふ立て力をあらそふへし人の上として周旋の機發を專ふふしかたし唯心ふくきハ羽柴筑前守ふり志られとも今西國ふ在て毛利と弓矢を取真最中ゑる

は織田殿斯の如くふり玉へハ筑前かためはハ百万の加勢を失ふと云へくも毛利ゝ方ふハ百萬の援兵を得たるふひとしされハ合戰の勝敗いふ迫もふし今日や明日ふも筑前毛利のためは討るへし万ゝ一筑前西國ふて討さゝともよきもの多く討をて其身をかり遁さ来ぬへしさてハ播州も筑前ゝ心めまくにハふしかたらるへし何とて足ふかく都まて切ゝくのふるへきかくて一両月をそこを内はハ明智と共は都ふ住し天子を挾んゝ四方を切定むへし其内ふハ味方ふ加をくる大名も多のるへしと兼ておもひをかうしふるを只今俄は光秀と手切せはたちまちは討手をさしむくるふゝんこれを防くまをふたや

をからし能く計らひゆへといをれしのハ松倉右近島左近と目を見合仰のおもむき一理あるふハ似くゆへとも草ハ風ふのべふし水ハひくにふゝる天下誰人ゝ順ををゝく逆ふ右たかふへき織田殿いゝは悪逆無道はまし ばゝとも正しく主君明智光秀何ふと軍畧ふ長し智計をくれたる人ゝも逆臣の名たのかれかゝし大織冠より此方累代忠臣の御家ふるを忽ちは悪逆合体の與力あらんを春日大明神の冥慮まゝにおそれ入くゆふう去ふから只今眼前の難をのかれゆをんためはゆへハかりは一味の返事をふされ且病はゝを寄て使者は御面會をあるまし くゆとやける処へかゝく左近ゝ下をし西國の間者をし

をかへ置ヤけるハ筑前守備中高松の城を攻落さんとて
塘を築て谷川をせき入しふとよ城中水のかりて難義し
ける処毛利三家後援として出陣し筑前と二三里の際よ
對陣そ毛利三家大勢ふれとも信長の後援を氣遣ふてか
るくしく戰ひをいどまず然るふ六月三日ふそや本能寺
の注進ありしかハ筑前守これをかくして急よ三家と和
睦を約束し六日ふ高松の城をてとし和睦とてのふと直
よ信長公生害の由を毛利よ告知せ七日の暁天よ高松表
を發足しけるとヤ云ハ左道大よおとろき然らハ最早
筑前守切てのかるそ
姫路より備中高松まて廿一里余姫路より大坂まて廿

四里大坂より京まて十一里なり
遠からし西國の大敵たる毛利をさへ事故ふく切從へく
上る筑前守ハ筑前もし切て上るふらハ山崎の天王山
おそ大事の軍場ふれ當方八幡山洞ヶ峠よ御陣を居られ
然るへし必定明智と羽柴とこの山を中ふしそ合戰ある
へし誰ふてもあれ山をそやく越たる方おそ勝利を得へ
きふれ其時いつれへむけても洞ヶ峠より切て出勝たら
ん方へ御從ひ然るへしとそからひけるふより諸侍大將
諸物頭いつれもく此義もつとも然るへしと其日の評議
もさて止よけり是ハ六月の八日の正ハ京都よりハ日
向守光秀筒井か便宜おそしと待ける処へ使者たちかへ

り順慶不快ふて風を疾む間面會をいたさんゆへこう羽柴筑前守切上りゆゑく定めて山崎より天王山を大事の軍場と心得ておゝ上りゆへし然ハ大和國の諸侍中ヤ合ハ幡へ出張ヤへきにそゆ憚至多きヤ条ふハゆへ共天王山より此方へいゝ形る筑前守にもゆへ一足もそてませヤまゝくゆとヤていゆといへは光秀大ふ不審ゝ是程の大事ふ幾日ふ出張とたゝこのふヤ越ぬゆ第一ふ疑そゝ思ふふ島松倉の両人ゝ運を両端ふかけ順慶をそくめて使者ふ面會をこそゆ者ものふるへゝ千丈の堤も螻蟻の穴ふ崩るゝ世の習ひ油斷ゆるらゝ其實を探知ゆ又謀もあるへゝとて溝尾庄兵衛を郡山へさゝ遣ハゆ是ハ兼ゝ懇意の溝尾形り病床たりともくるゝからゝといそく必定呼入面會ゆへゝ能ゝ容子を見定め來るへゝとて出立さゝ郡山ふてゆ京より重て溝尾を使者ふ立る由きくと其侭島松倉順慶ゝ前ふ出て謀ける様今度ハ溝尾庄兵衛來る由ふゆ是ハ年来の御懇意也御面會ふくハあるふゝ夫ふ付某ゝ存付たる計策のゆとて宿衣七ゆ八取寄順慶ふ打きせ小性ともに左右の袖をおさへさせ左近ゝ參るふそこの宿衣取手ふふゝとかたくヤ掟て扨島松倉ハ庄兵衛ふ對面ゆ庄兵衛光秀ゝ懇志をのべ末子を人質とゝて進上ヤゆ間早く御出京万事御異見ふ預り度存ゆ扨御病氣の由ふ承そりゆへ共年來御目かけられゆ庄兵衛ふゆ御

平臥の御体何ゝくるゝくゆへさ罷通う御小性衆の列ふて御目ふかゝるゆへそんといへは島松倉かゝこゝろゆ其由ヤへさとて奥の一間へ入ふけり

郡山勢八幡洞ゝ峠へ出張の事

并津田與八郎諫言之事

島松倉ハ奥へ入順慶ふ内意をもめゝ合をさて溝尾を奥へともるへハさゝいゝふ土さへさくる夏の日の暑中といへともそりゆきてふとゝいあゝゝと人もいふ水無月十日のまひるころ總身熱氣えふえたゝく汗をふかゝて見へふからあらさむやあゝたえのさやいゝふれハかやうにゝをるをといひ形がゝ宿衣五ゝ六引かつき其つま

より風の入るを強く押えよ小性ともこいふより外いゝとうめく計ふて正体なゝ庄兵衛もこの体を見そあきれて島松倉ふ向ひ御主人斯の如くおそゝまをは何事をヤ入るくとも定かふ御埃拶もあるまゝ此上ハ各こ能く今別あゆて羽柴筑前ゝ上洛を八幡山崎の邊ふて急度御くひ留ゝかるへくゝ若又御病氣少ゝも平和ふゝ早早上京いたさ弱ゝ様取ありあひ可被申ゝ但御人數出張の事ハ今明日のうちふハ幡まて相違ふく罷出られゝ様頼入ゝ御人質の義ハ順慶御快氣のうへ御送りあるへくいとヤせハ島松倉一同ふ此旨我等両人御請ヤてゝへハ更ふ違變これふくとヤけるふより庄兵衛もまとに以て

両家老衆の御口状たのもしく存じ然ハ御約束の通り早く御そばらひゝへかゝー仰ゐ従ひ人質ハひとまづ京都へ同道いたしー追る進ーゝ様取計ひ可ヤゝ迎庄兵衛坐を立て書院ゐ出れハ中門の廊の邊ゐハ侍多く居こかれそ旗取いさー招きをさそき竿をきらと只今うち立けーき肥り又廐のあたを見ゐたきは堪来七八十匹引たて洗ゝ飼ゝ沓をうち是も今や鞍おくかと見ゐたさる庄兵衛心ゐ感称ー何さゐ筒井ハ聞ふる弓取ゐり今と云そ今かくそかゝり出陣の支度そゝのふハ日頃の作法正ーき故とゐられたりと思ふ處へ島松倉まゝと立出そ今宵ハとヤ度ゝへ共只今より打立ものもゆへゝ万事合期いたさゝゝせめて

御馬一足進上ヤ度ゝて見定ゝ處これゐたもの前ゐて人人おーそゝゝ京ゐて御引入ゆへとヤて黄金廿両を引たりーゐハ庄兵衛も両人の懇志をよろこひ直ゐ帰京ー有ー次第をくハーく語ゐーゐハ光秀更ゐ疑ゝ順慶ハ快氣ーて上洛を今ゐくと待たりけり郡山ゐてハ島松倉奥ゐ入順慶ゐ著をー夜著を取のけさそゐー若敷おゐーめされつらんされとも溝尾真ゐに信ーて罷帰りゝ得ハそや明智ゐそこーも氣遣ひゐー羽柴ゝ先手崑陽野伊丹瀬川ゐそや著ぬらん島左近ハ年若し早罷向そ筑前守ゐよくくヤ入られゝへ松倉ゐ出張の人數をそろへヤへーとて座を立ハ順慶も心更ゐ一決せそとゝへとも手足ゐひとー

き両家老のそからひあれハこれをいあともいひあねハ
且溝尾ゑ約さーエもものうそゑもかくあも山州八幡の鳩
ら峯まて出張ー軍の運ゑまかさハへしさらハ手分をせ
よやとて十市越智箸尾のものをハ郡山の留守居ゑのこ
ー松倉森を先陣とー大旗小旗三十餘あかれ松のあらー
に吹ふひらさハ幡をさーて打立たり
郡山より歌姫越ーく山城國相樂ゑ至る二里ゑ近し相
樂より杜師祝園を過綴喜郡高木田邊天神森より洞ら
峠ゑいたゑ洞ら峠ハ八幡山の南十八丁余ゑ有山城河
内の堺ゑ有觀應のむかー赤松勢の陣を取ー處また八
幡合戰ゑ時ハ宰相中將義詮朝臣の陣所とゑる

とかくもるうち筒井勢二万余騎洞ら峠へ打て出ー由京
都へ聞えーかハ光秀大ゑ悦ひ使者を以く御病氣御快後
其地まて御出張の条過分至極大慶これゑ過ぎハ御人數
をハ其邊ゑ陣を取とゑひ順慶ゑハ早く御上京まち入ハ
趣をいそを酒肴を贈りーかハ松倉使者ゑ出會ー順慶事
状方ゑハハへともかく逆上ハよく眩暈さー起り勿く
出陣おもひもよらんハ得共我くかたく御約束仕りハ車
故是まて出張仕りハ旗馬ゑるーハ順慶ゑてハへとも内
実ゑ郡山の城外ゑるかた山里ゑかくー置て養生いたー
ハふりあるかーこ人ゑふもらーゑひそと聲をひそめて
語ゑ至けり使者其旨さー心得て馳かへり光秀ゑかくと告

光秀肩をひそめ是ゝまゝに家老ともか両端ゝかけて軍をこゝろむる方便ふりとそや悟ゝ知といへとも西國より筑前守か切上るよし時く刻くゝ注進あるにより筒井りゝとハそのまゝに手ゐいゞゝそ勝軍ゝたらハ忽ちゝそせまいるへき者也とてまゝ山崎へ出向ふへき手ゝけをおそハいそきそれ爰ゝ又尼崎ゝ在ける織田七兵衛信澄ハ京都の變を聞く大ゝ悦ひ津田與三郎志水嘉兵衛渡邊源右衛門の三家老を近けり右大臣殿ハ我烏ゝ父の仇なれとも時節ゝく今まて漏さゝをやらに光秀ゝ手をかりて是を打たり此上ゝ不意ゝ大坂ゝ責上ゝ神戸三七を討取曷の光秀ゝカゝ合さそやとおもふくそや其用意せよと云ハ津田與三郎其謀ゝにゝよゝゝくゐへとも三七殿ゝ丹羽五郎左衛門とゐゝ古兵ゝき居てゐへハ此方ようまつ京都へ使者をたてく光秀と諜ゝ合せ両そたを以く追討あらハ勝利疑ひゝくゐもゝまた左も無ゝ當城をゝてくひそかゝ京都へ御登ゝありて日州と一川ゝゝうゐそん工必勝のそかりゝと存ゐとやけれハ志水渡邊もこれ究竟の計ゝゝゐそやくその御催ゝ然るへくゐと衛めゝかとも七兵衛何とゝおもひけん有無の返答ゝ及ゝゝ黙然とゝく居たりけり

筒井順慶ハ大和國添下郡筒井村ゝ別業をいとゝゝ愛ゝて筒井と名付

筒井り〻筒井の底の清水影むもふ手多きふの暁雲
とよゝ軍のいとまにハ唯識論を講ーかりハ神道をよ
ひあるひゝ茶事をたーふゝけるといへり郡山より
南ふ向たれ玉
織田七兵衛信澄ゝ勘十郎武蔵守信行の長男也信行そ
しめ末森の城ふ住ー柴田勝家佐久間大學長谷川惣兵
衛山田孫右衛門是を輔佐ゝ弘治二年八月信行勝家と
共ふ信長ふ叛きけるゝ信行の母ゝひ言ーて一旦和睦ー
つきとも終ふ同三年正月信行をよひ池田勝三郎信輝
をーてこれを殺さーめ末森村桃岩寺に葬玉松岳道悦
大禪定門といふ行年廿一歳とかやその子ゝれハ信澄

ことー廿八歳なり
或云島左近鞭をあけゝ攝州瀬河の宿ふ着時ふ一人の
遍參僧あり左近ふ向ひ客ゝ殊の外ふ急きゑふと見受
たり定めて羽柴筑前守の陣へむゝひゑふ人と見えた
う筑前守殿い軍令殊の外ふ嚴重ゝう客の如くいゝめ
しく馬ふのりたる人ふとを見ゝ忽ふ誅せらるへーそ
やく馬をもてゝ歩より赴きゑふへーといふよより左
近あやーゝゝから御僧ハ何人そと問僧のいふやう頓
て知るふらん先拙僧らいふ侭にふーて行ふへといひ
て打過ーか後ふおもへハ其僧ゝふゝち筑前守ふうー
とあり

重修真書太閤記六編巻之廿五終

重修真書太閤記六編巻之廿六

尼崎三臣再ひ諫むる事
并丹羽五郎左衛門尉紀州へ向ふ事

良あり て七兵衛信澄ヤされけるハ上京ーく光秀と一川ふなると使者を立く牒ー合を挾を討んとの軍畧よろく聞えいへとも爰許より京都まて行程十六里使の往來彼是ふく事の漏んとを恐るれハ牒使のとハ尤拙策あるへー又四國征伐のため是処まて打く出たるものか京まく引返さんとも餘をふいひひなりるへー

信澄尼崎ふ下るーと云と他ふ徴ふけきハ暫く流布本

ふ從ふ陰德太平記ふ三七殿ハ四國退治とーて泉州岸和田ふ在陣ー給ひけるか信長討死ふとふと聞き大坂延引返されまけり其頃惟住五郎左衛門ハ大坂の本城ふ在けれハ急き三七殿を呼入評議ーて曰く織田七兵衛ハ光秀ら壻ゐれハ渠ふ一味せぬとハ有まーいさゐ先七兵衛を討き其後光秀を誅伐そへーとて西丸へ押寄一時攻ふ攻入ハ七兵衛もさゐる勇士なり自身切き出火花をちらーて防き戰ひけるか寄手の中より長江縫殿助と名乘き射ける矢ふ信澄股を射さとてけれハ今ハ是延へとて天守へ上り腹かき切きふーたるを丹羽ら家臣上田主水重安首を取てけりとあれハ始より大坂西丸ふ住ーと聞ゐ

我父の仇を報ゆるふ明智ら手を假ーさへ快よからぬふ三七や五郎左衛門を討まても人の力を頼まんとふ餘ゐに武器の薄きふ似たり且日向守かねて大坂のとハ某ふ打任とき頼むと有ーにあらそやそれを事新らーく牒使を立んとふ児女子の心乃如ー某をいまた敵とも味方とも思案の定まらぬ處へおーかけて三七を打取へー三七ふ討果さは其餘のもの更ふおそろーけるー五郎左衛門ハ勇ゐり智ゐの志とも獨立の志ゐー蜂屋鹽川ゐとハ元より云ふ足に先んをれハ人を制ー後ゐれハ人ふ制さらるくとふふあらそやとゐへハ津田與三郎貞興ゐらさゐ殿

の仰らく處勇ましく弓矢の道に於て更に恥さまに覺えい只殿ゝ大事の御身形り始終の勝利を本意とあるべきるへくい三七殿又ハ五郎左衛門をきに御自身御手を下さるゝ迚もいべからに殿ハ御違例とヤ立御名代として貞興罷向ひい由を披露ーいそんふゝ何氣ふく三七殿も出會あるへくい其時とひこ〻ゝ打果ーヤへくい三七殿うたれぬそく蜂屋鹽川の人くもかゝらに心替りを生ーいひふんさてハ丹羽五郎左衛門も一人とーてハ何共決断行届くまー兎角ひまとくいうちに御出馬ハて御取静めあるへくいさふくハ御違例以の外とヤ立三七殿をこふゝへ御呼いて御そからひいへく何ふも御使た

某罷向ひヤへくいと言上それハ志水渡邉一同ふいろさふ是ハ津田御手前ふかきるとふい命を棄る事ハ我等とてもまけハいたさにいへとも御手前ふゝてハ御使ふ罷向ひ三七殿と差向ひてものヤさんとあるかさー天晴御筋目をいひ心の底の剛ふるとよと褒られそ津田ハ面目をふとこーぬ

織田八郎彈正忠信定の兄を津田與十郎信員と云信員の子長を與十郎信興と云弟を與三郎貞興と云信定の子備後守信秀也信秀の長子信長次子信行信行の長男信澄ふれハ貞興ハ祖父信秀の從弟形り信澄血氣まさふ盛んふれハ曾て津田ゝ諫を聞入に其方

共のそかる處定めてよろしかるへし然るといへとも今
度のことハ我をてふ決定したり再ひ言ことふかれと云をて
く籠鎗持以下用ふ立へき者三十六人を召具し大坂さし
て出立るこてふ七兵衛家臣ふ朽木六左衛門白坂左内と
云者ありいつれも鎗劍を以て七兵衛家中へ師範ふしけ
るにより始ハ信澄も二人ゑ學ひそるろ後ふ丸信澄器用
抜群ふしく二人い有とも無ふ似たりこれゑよりて終ゑ
家中の若きものとともいつれも信澄ゑ從ふく息合て學ひ
又ハ太刀の曲尺を習ひけるを以て朽木白坂逆心しひて
かゑ七兵衛明智ふ與黨しつる由を神戸丹羽の許へ告た
りけるを是非もるき又大坂表ふハ長曽我部退治のため

神戸侍從信孝丹羽五郎左衛門長秀蜂屋中川高山鹽川以
下一万五千余騎難波の御津の浦ふ兵船をそろへ渡海の
順風をまちて四國へ發向をんとせし処へ五月の下旬信
長公より竊ゑ仰下されそるハ石山本願寺の顯如教如動
定ふ從ひ石山を退城をといへとも免ふつけ角ふつけ延
引ゑ及ひ今ハ紀州鷺の森ゑこも弘とさけり教如ハ播州
ふ下向し増位山ゑのふりく弘通を勤むるよしたしのゑ
注進をるものありく驚森ふハ次男興正寺顯尊三男准如并
ふ家臣下間七里以下の門徒七千余人と聞を此輩出家の
かたちふして女犯肉食し袈裟衣の下ふ邪見放逸の甲冑
をよろひやゝもをれハ一揆をくをたて國の爭亂をすね

く我これを憎むを一朝一夕のをに非を其方とも早く四國へ赴ふりをしく紀州へおし寄焼討ふして顯如父子を始一人ももらさをこれを滅しふそこの宗門破滅ふ及ふへしふふく此期をそげをへからすと下知をられけるふより丹羽五郎左衛門尉手勢三千余騎を引そけ左京進村上周防守江口三郎左衛門尉左衛門尉尾藤彦兵衛を大將として二千餘騎を山口越ふ大田小源太溝口金右衛門青山伊賀守戸田武藏守坂井與右衛門以下千餘騎を濱手より紀州ふ押寄五月廿九日先陣をや鷺森ちらく陣を取

陰德太平記ふ五月上旬神戸三七郎を大將として一万余騎長宗我部追伐と披露して京都を立大坂ふ下を其より堺を通り岸和田ふ本陣を被居タれハ諸軍士ハ濱の手と山口越と両隊ふ分れて屯を張万人是をそてあら心得をや四國渡海ふらい海邊ふのを陣取べきに山口の方ふ向く陣をるをハ何樣たをやつて紀州ふ御座顯如上人をや攻らるくやらんと近郷ふ在ける一向宗より注進して御用心ふへと驚かし奉るにより上人頻て鷺森を退去ありく和歌山ふのり紀の関守に下知して小野山の峠ふ荒垣いをせ弩をり門徒の僧俗雲霞の如くあつより寄る敵を待かけたり六月三日の早朝ふ三七殿の先鋒をや鷺の森へ押寄関を作螺鐘ふらしを攻たりけり門徒の方ふハ如來の御迎祖師への報恩

此時なりと命をおしまず防戦せしかハ寄手案ゑ相違し數十町引退き一息繼そ又さそせめんとて引去ける か已刻計ふハ寄手裏くをれし大坂さして引そゆくいろふる事やと不審しけるか後ゑ聞ハ明智謀叛して信長公昨日弑せられのひし注進によりて也と見えたり顯如上人をよい顯尊准如をそしめ室家女房たちハ門徒等の注進ふよりをそに驚森を退去あゑ川きハ爰ふ殘ゑ止する下間川那邊七里粟津礒部森森川以下の門徒七千餘人何れも志を一川ふして身命を惜まず三尺の利劍ゑ破らきていハ九品蓮臺ゑ迎えらるへき因緣なりと互ゑいさめ合寄手おそしと待けるゑ其家ふゝぬ人の身ふ似川

かそしかうにゑ見ゆれとも又ゆくしくそ見えたりけり寄手既ゑ鉄炮を放し畑の下より関をつくりかけ攻つゝこをうてハ逸雄の若武者馬をのり放ちくえや總門を打破きと聲くふ叫ひさけんて寄しかハ下間法橋七里大夫等そしゑ廻りく下知しけり爰を專とそ防きける寺内ふ籠る處の老弱女童ハ佛敵法敵上人の御敵たる信長なり我等ゑ礫ゑ小さくとも其身ふあたれハ大盤石ゑとカふまかきて投けるかふしきやこの礫ふあさるもの或ハ眉間をやふられ又ハ齒を打おられふとして死るまてゑふく共軍そてし後まても疵を痛み苦しそけるもの多かりけりかくてゑ寺内の防戦そくく數かゝに寄手ゑ荒手を

入替くも三合とも味方を始終七千餘人何ふもして雑賀
藤代の門徒等ら後援の来るを待けるやふと評定しけ
ふ処ゑ其丈六尺有余の大法師黒革おどしの鎧ふ大袖つ
け白布の鉢巻し五尺計の大太刀をそき搗杵二本を左右
の手ふもち不退寺の即空と名乗て丹羽ら本陣へをせ入
あの搗杵をもて打そうくふしける程ふ丹羽ら兵士やふ
そふ七八人うち倒されあるひは中天ゑ搗あけられまた
はうちかさねて搗をゑられまたくうちゑ半死半生ふ
等をこたしそふしまろふもの幾許と云數をしらに味方
より見れハ只一人の荒法師ふ於ゑ寄手の方より是をミ
れハ同し様ふる法師八九人そのり出見へけるもふしき

なり寄手ハ目ふあまる大勢ふれとこの法師そらふ搗た
そられそ右往左往ふ散乱しかとく人馬ともふ足を立か
ねし体を見て大田溝口青山戸田坂井等鞍かさゑ立上り
鎧ふんそう采配とりてきたるしもの共敵ハ小勢そしか
も法師ふりおし並へそ組ふをゑ五人七人よせ合て一緒
ゑかゝれと下知しけるとも飛鳥ふんとの如く前ふある
かと見れハ後ゑすはり右へと見れハ左へうつる電光石
火のそけしさは手ふもそられをかけろふの有ふの無かと
あやしまれ只同志打をふしたり丹羽五郎左衛門是只事
ふあるへからん一先帰口をゆるへそ軍兵を休まをそや
と思案し擧貝を吹たそ士卒を引上しかとふ彼法師も寺

中へ引き入よけり長秀さらハ焼討ふふしてんものをと工夫して近隣の在家をたほち焼草と成し既ニ火をかけんとせし處へ京都の大變を告來るしかハ長秀速ニ陣拂しき大坂へ引返しけり

野大史云羽柴筑前守ハ信長の死を聞て清水ニ腹切せ然しき和睦を取結ひ上洛し長秀ハ京都の變をきくや否即刻陣を拂ふ是自然と其器の大小を知ニたれるとと云へし

鷺森寄手敗北の事

并織田七兵衛信澄討死の事

寺中ふくハ法滅佛滅たく此時なりと心を一りふふして

大聖人善智識の御真影と共ニ僧俗男女老少をいそ化無常の烟と立登らんとを覺悟し勿くおもひ切し上ハそるも涼しくかりハいさまし、然るふ味方の法師一人ニ切立られ丹羽の軍勢俄ニ崩れたち遂ニ陣拂ひして引返しけるとと只事ハらにこれ全く宗祖聖人の威神力を添られし處ふるへし併すり即空を召て當座の褒美あるへしと名れしかとも何地行けんかきくれ見えにあまりの不思議ニ不退寺といふ門徒を尋ねしかともこの邊ふさる寺ハふしもあくハ他宗門ニやと普くこれを問求しニ誰ありきこゝなと云人も非し是ハ何様祖師大聖人もしくハ歴代の善智識のりニ化現せしふるへしふんといひ

あへて兎角をるうちゐ明智謀叛して織田殿生害あり
由たしかゑ注進ありけれハ是偏ゐ彌陀如來燈明佛の明
智ゐ胸ゐとけ入せ給ひしゆらんと迫も沙汰しけり
一書ゐ不退院釋即空といふゐ鈴木源左衛門尉重幸の
法名なり雑賀某の家ゐ傳ふゐ九字名号の裏書ゐ見ゑ
と有
丹羽五郎左衛門尉長秀ハ取ものも取あへゑ大坂さして
引返ゑこれハ三郎信孝京都へ切て上り明智を討んとお
もひ立れしかとも一人の力ゐてハ如何とあやゐまれけ
るゐより長秀を急ゐよとそれしゆゑ長秀大坂ゑ入くやけ
る様三七殿を大將として京都へ責上るゐ安き御事ゐハ

へとも尼崎の織田七兵衛信澄ゐ明智の婿といひとゑ右
大臣殿ゐ伯父ゐから父の仇と日比ねもそれて折節ゐ色
ゐも出し間ゐ見光秀と一味をぬとハゑもあらし然ハ攻
上る後を七兵衛ゐ取切れんと疑ひゆゑ因て三七殿より
使を立られ信澄を當地へ呼寄其心腹を探見ゆゑて後ゑ
打立ゐへしと計見けるゐより然ハ使をヤ付んとゐる
處へ尼崎の朽木勾坂ゆ使来りて信澄明智と合体し大坂
へ來る由を告しかハ然ハ使を立るゐ及そに爰許へ來る
意趣も大方分見たれハ此方ゐても仕手を撰ふへし誰彼
よからんと穿議ゐるゐ峯山竹右衛門山路段右衛門然る
へしと衆議一決をしかハ二人ゑ能くいひさとし今や來

ると待たりけり然るゐ万一此二人仕損しゐいらくせん
と危ふまれける處ゐ上田主水重安いまた左太郎とて十
六歳ゐりけるか進み出左のゑ御心を勞しゐふよ及ふよ
し信澄とのたとへハ鬼ゐもあれ神ゐもあれ此處へ來う
ゐひるハいらふゐもして打取可ヤと事も形けゐヤけるゐよ
り然ハ能々心得ハへとて初の如く竹右衛門段右衛門を
仕手とし左太郎を加勢と定められたり
尾州愛知郡星崎の上田弥右衛門重氏清和源氏小笠原
の庶流ゐり丹羽家ゐ仕ふと云重氏の子甚右衛門重元
其子左太郎重安なり天正十三年長秀卒して秀吉ゐ仕
へ越前ゐ於く一万石を賜そり文禄三年七月廿九日從

五位下ゐ叙し主水正と称し豊臣の姓を賜そる後入道
して宗故といふ故ありく浅野幸長ゐ仕ふ
織田七兵衛信澄ゐ家老ともの諫を聞いれを自身の勇氣
よゐこり家子郎等そつのゐ三十六人を引率し大坂ゐ赴
き神戸三七を討取丹羽長秀を追ひ大坂の兵を奪ひ光秀
ゐカを合せ羽柴筑前守を防ゐんと血氣ゐそやりて出立
けり大坂ゐくハ白坂朽木ゐ内通ゐくとも七兵衛を呼よ
せて事をそからそやと評定をし處ゐれハ尼崎より大坂
まゐく路次を掃除し處くゐ人數を出しくこれを禮しゐか
ハ信澄紫ゐ相違ゐくおもそれしかともさたゐ剛勇の若
武者ゐれハをこしもおめたる色形く大坂ゐいたりか祢

く設けゝ西丸の玄関より忍ひ入來あり

一書ふ丹羽長秀鷺森ふ發向せゝハ天正十年六月二日の早天ふゝて鷺森を引拂ひゝゝ三日の巳刻ゑりといへり京都より泉州堺ふいたる十六里堺より石津貝塚を經て山口まて十一里半合せく廿七里半ふ遠ゝ然るふ光秀の飛脚三日の曙ゑ鷺森ゑ到着ゝ右大臣殿父子を打取たり其表ふくよく防戰ゝゝへ程ふく加勢を差下ゝ後より三七ゑらひゑ五郎左衛門尉をそさこ討へゝと約定の誓書を送りしと也五郎左衛門尉このことを窺ひ知てかれこれと手間こらは處くふ一揆起り大坂まて引かへゝかたからんとて急ゑ兵を擧ゝとく光秀の

飛脚ハおゑゝけれとも一人ハ秀吉ふこらへられて毛利いまた京の變を知ゝ一人ゑ敵ゑ通ゝて長秀いまく京の變を知ゝ其事同ゝくゝて成敗ゑゑゝからたけく

ゝその人の運ふよるといふへゝ

重修眞書太閤記六編卷之廿六終

重修眞書太閤記六編卷之廿七

上田左太郎大勇信澄を斬事
并尼崎之諸士死亡の事

織田七兵衛尉信澄大坂ゟ到著しか紛て定められし西九へ入來ありて玄関へさしかゝるハ神戸三七殿の家人峯山竹右衛門山路段右衛門式臺ゟ平伏してこれを迎えさて先ゟ立て武者縁通り中の間へ案内し客殿へ来てこゝ迄ふ處を両人近くと誥より七兵衛殿御覺悟あるへしと聲をかけて切かゝる信澄ふりかへり心得さる樣とゆ仰ゟ來國次二尺三寸の大脇指を抜そらひ二人を相手ゟ上

段下段散くに切立ふから大音ゑ三七殿の家來中乱心し
たる様七兵衛ゟ侍ともそや來れとよはくる聲をきくや
否三十六人一同ゑ抜ゆを切くる入是ハやねくより合さ
し事ゑと大坂ふくハかくえかを七兵衛の侍とも心を
一ゆゑ死を輕んしそたらくへーとおもそねハ以の外ゑ
周章し上を下へと混乱しゆをとも大勢ゑれハ折かさゑ
らく切結ふされとも尼崎の侍中ゑ今日をかきりと狂ひ
まはるふより大坂方多く討れつ手を負つ殿中ふくハ思
ふかとそたらかれゑ廣庭へおひきいたし大勢の中へ取
こめく討やうてやと下知しけをとも三十六人ハ信澄の
前後ふ立て影とゑり形をかくしちともそゑれをたくか

へハ峯山山路の両人も秘術をたくしふこと込く霞めたち
龍虎の大事互ゑ得たゑ處ゑれハ更ゑ透間も見えはまそ
されとも信澄ゑ六尺有余の大兵ゑり力三十人ゑ敵しを
かゑ早業ゑ天性つきし處ゑしく飛鳥の如く走ゑ廻り太
刀のひゑりゑ百條の電より猶そけしけをハ峯山竹右衛
門信澄のいらつく拂ひ打太刀を請そんし右手の臂をを
たくあゑ切かけられゆゑる太刀を取おとしをゑ口お
しと山路段右衛門我身の大事とふこ込く進こゆく心の
かこゑ様武かりけをさとも信澄ゑ兼て聞そし勇士ゑ
りくく劍術の達人ゑり段右衛門ハ左の目の上より頬さ
きかけく切先強く打こすれしかハ流るく血眼ふ入て手

先くるへハ今ハそや七兵衛を討もらしけへく見えける
處ゑ上田左太郎次のゑより駈出るかゆく承そう及ひし
にをゝさせゑをぬ御太刀風かふそれ式の御力ふる我等
を敵ゑもちゑふを御果報とやへーいく御首をは重安ゝ
賜そう可やたくゆと荒言しをから二尺九寸の大兼光を
抜かさーてをたをあふ

備前國邑久郡長船住左衛門尉藤原兼光建武四年八月
日とあゝ大をたれ二本ひなゝ父兼光ハ文永の頃のか
治也初代と云大兼光ハ二代なゝ正宗の弟子と云四代
ゑゝあゝ

信澄きつと見て推參ふる怪ゑふかゝをたけれともこのせ

の暇取せそやといひけ、例の國次を打ふゝく切むをひ
竪ゑきれハ横ゑそらひうけけ流しけをそーかゑとハ戰
ひーゝ何とかをけん左太郎か切こむ太刀を見損ーてや
信澄の肩さき深く手を負ハ今ゝ是ゑてと客殿さーて引
ゝく行をのかちーと追かけゝ終ゑこれを切ふをたゝ峯山
山路このゝの音ゑ立ちかゝるを見て左太郎大音聲ゑ織田
七兵衛尉信澄ぬーをハ上田左太郎か打とめたゝとゝはゝ
そをふゝく首かき切て立出れハあく打たゝやと上下お
しふへて感をる聲をやまさゝけゝ七兵衛尉信澄生年廿
八歳あそれふ弦あふ織田一門中大勇猛の名將ゑゝける
か運つきぬれそ十六歳の小冠者ゑ念をく討れけゝ

流布本信澄廿五歳とゝふものハ誤なり父武蔵守信行
弘治三年正月信長のためゝ生害なり時ゝ七兵衛三歳
なり弘治元年乙卯の生れなり弘治元年より大正十年
ゝ至りて廿八年なり廿五歳と云説ゝよれハ永禄元年
戊午の生れゝて父信行害せられし後ゝ
かくと聞より廿六人の侍とも今ハ誰か為ゝ命をたゞ
んとて手負し猪のあゝ如く右ゝあたり左ゝ突たて
狂ひ廻りしかハ大坂方ゝも五十餘人ハうたれゝ薄手いさ
での者ハかゝを知らゝとかや
一書ゝ信澄ゝ従ふゝ大坂ゝ於て戰死せしものハ誰く
そ津田權内宗一津田十郎兵衛貞安菜原次郎左衛門松
山新六郎水野權六郎服部藤十郎延友八郎左衛門伊丹
藤右衛門鶴川左近右衛門兵藤新八郎鈴木半十郎延城
寺七九郎吉城藏人大夫を始三十六人とかや

四王天明石伏兵奇謀の事

并清水長左衛門忠死の事

尼崎ゝてハ津田與三郎志水渡邊打寄て大坂表の首尾を
心元ゝく案しゝらしける處へ櫳の仲間藤八郎淺手ゝか
らも七ヶ所手を負てそしゝて來り大坂ゝての始末見たり
し侭ゝかたりしかハ三人ともゝ齒をくひしゞり扱も殘
念や口惜や何といふともこゝる跡へんさてこれよりハい
つゝよせん三千ゝ近き兵士共有ても大將一人かけられハ

當城とそもかこえかたし但主人七兵衛殿の心中ハ明智一味ゑ相違ゐし然ハ我くも明智殿の旗下ゑかけ入て大坂の三七殿ゑえせ向ひ七兵衛君の弔軍して三途黄泉の幽魂をゑくさめ奉らそやとおもふ面くゝ何とぞしゐゑふそとあさうを見てたをは二千餘人の侍とも異口同音ふ何さゑ與三郎殿の仰ゑそをゐうふへく存い我くも御邊と共ゑ明智殿の御方へ參りゐて必定御邊を大將とゑるさるくにてくゐへし去からハ我くもむふしく牢人とゐてくゐ、かしこふさをらそんよりハ今まさの如く御邊の御手ふ付花くしき軍して名を後代ふ傳へんかそねうえしけれそやう當城を明て上京し明智殿と一手ふゐりゑ

へといひれもくもよろこひ勇ミて勸めしかハ津田志水渡邊大ゑ力を得さらハ事の發覺をゐるゐち神速ふ出立ゑへといふより早くそれく入へきものを取ゐくめ不用ものをハ海ふしゐめ都合二千七百余人夜の間ゑ尼崎を出たちて其明日午刻ふハ京著し明智ゐ陣へかくと言入けきハ明智大ゑよろこひこれそ誠ゑ逆中の順亂世のうちの義士齊の田横ゐ從士ふも比ゐへし當時得あたき勇士かゐと感歎しゐく呼入てくいきき對面し七兵衛尉の戰死をゐけきてもかへらぬ工面くの意入おそたのもしくいゐれ當手ふありて十分ふ粉骨をつくされかへし本意の上ハそれくふ一郡一國をも管領ゐしゐひ天下靜謐

の功をあらそーはへそれ迚ハいかれも津田志水渡邊の
與力として百戰百勝のそかりとを回らされはへまかそ
れ迚の堪忍分として相當の兵粮以下ゑ溝尾庄兵衛より請
取ヤさるへーと残る所ゑを明智ゑ言葉ふいかをも安堵
ーたりけりされハ山崎の軍にも左備の先鋒として濃州
の忠戰をハ遂たんゑれ扨又光秀の心中ふ七兵衛尉を勝
己ハゑる勇將なり其上ゑ三千近き人數もちにーてゑかも
我壻ゑり一方ゑ打まかをてたのゑーくおもいたりーに
かくそゑ様ゑく戰死ー細川忠興も壻なりこれまさ二心あ
らーと思ひーゑ我妻の縁を離て女をかへー筒井順慶ハ
かの家一旦断絶をへゑりゑけるを光秀さゑく取ゑーゑて

大和一國を全くせーゑれそこの人よも別心ハあるへか
らに家中の大身とても其ゑ故ゑ本領を全くをるををお
もひーちぬものハ有へかゑに然を大和一國ふ於をハ我
領國とおふーきおもひをふーたんゑるふ筒井大熱病ふ
を上京せにさらハ家老のうちふても上るかとおもへハ
人數をゆりを召具ーて洞ゑ峠ゑ陣を取然らハ底の心ゑ
いかゑらん行末かけてたのまれをかやうに三方の心あ
をかをゑ見門ゑハ西國へ下向をー羽柴筑前守を毛利吉川
小早川の三將ふを打果ーはへとヤ遣をーける計策をか
ゑ様を頼を様るさてすゑ近所を取固め其後遠きに及ひふ
んものをとて安土ふハ明智左馬助を大將ふて兵士三千

ぎめ[illegible]にさ[illegible]置佐和山ふた荒木山城守を城代として七百余騎をこめ長濱をハ妻木主計頭安閑万五郎ふ二千余騎をそへてこれを戍らせ坂本の城ふハ日向守叔父明智長閑齋諸侍大將と共ま爰を取かためたりされハ光秀旗本ふハ齋藤内藏助利三山本但馬入道進士六郎兵衛伊勢安藝守柴田源左衛門川田淡路守明智十郎左衛門上野筑後守伊東志摩守鳥山主水助杉原伯耆守礒野彈正三牧三左衛門杉本主膳後藤喜三郎久德六左衛門村上和泉守安福右衛門奥田宮内藤田傳八郎池田織部正村越三十郎中澤造酒助小川土佐守溝尾勝兵衛明石儀太夫明智孫十郎内藤三郎次郎四方田又兵衛同但馬守山本三右衛門松田太郎左衛門古田權之助並河掃部今峯頼母久河三左衛門木村清左衛門海田太郎八以下七千餘騎此外信澄衆二千七百餘合せて九千七百餘とそ聞えける光秀又もやおもふ様毛利三家の衆もし筑前守をうちもらしふハ定めて猿冠者ゝ切上るふらん然ハ八幡山崎ハよき軍場ゝ淀ゝ味方のためよ究竟の根城なり修復をへしとて光秀ゑさと立越そ見ゆし且洞ケ峠の筒井勢ハ心得ぬをもあるぎや用心をよとて齋藤内藏助を八幡ふむけて陣をとらせゝ

淀城ハ永正の頃藥師寺與一ゝ城なり淀藤岡城と云永禄二年ふハ細川管領氏綱これま居元龜三年の比岩成

主税助の城なり但今の城地と同しかゝに
やゝふ處へ施藥院の中將と云者筑前守ふも日向守ふも
たゝひよ懇意ありけるふよりすゝり筑前守の方へ見舞と
して立越歸り上るとき都の大變を聞路次をいそきける
かゝーた形く下鳥羽ふて日向守ふ行會たりそのまゝに
打過んも後日のためいゝくとおもひーかハヤ入て面會
しけるふ光秀いゝ方へ行ーそと問々るふより筑前守へ
見舞ー由を答へつれハ光秀うちうふゝき都の大變かー
こへもそや聞えーなるへー筑前守ハさき驚きゝらん毛
利方ふてハ百万の後援を得たる心地そせられんそらん
さらハ筑前守の軍略定めて相違ありるふらん如何ふ見

ーやと尋ねられ施藥院ふいゝろのうちふ案ーける樣さて
ゝ此人の使ふ立ー藤田傳八筑前守ふ捕えられーとを知
ぬふるへー然ハ何事もふき体ふいひふーて爰をのかる
へきかたくー此人若勝軍ーたらハ施藥院ハ不實のゝの
とて改易せらるへーいゝふをそやとおもひ煩ひーかい
強く有のまゝにいひてふそ後難もあるすーけれと決定ー
さて答へけるハ其事にハ毛利と筑前守と和睦そのひ
近日筑前守上洛のよーたーかハ承そう及ひいとやふゝ
ハ光秀案ふ相違の体ふて筑前近日上洛とや然ハ其と一
戰せんとするふらん施藥院ふハそや歸り西へといひ夫
より陣中大ふさそき立取物も取あへぬ桂川をゝたーて

陣を取四方田但馬守と明石義太夫ふ密計をヤ合て池田尾崎伊丹の邊へさー下ル扨又高松表ふていハ水勢日ふ増けるふまり清水長左衛門かくて日を經るうちに城中ヒへく溺死ヒへー然らハ某一人自殺ーく大勢の命ふかヒるへーとて羽柴筑前守へ書翰を送り小船壹艘きよけふかさり立宗治一番ふひらりと飛のれハ宗治ゟ兄の月清入道ゟらひふ撿使ふ來りー末近左衛門宗治ゟ家人難波傳兵衛おゟーく來りつり静ふ掉さーて出け弓はまヒや弘誓の舟ふ慈愍の風をうけ生死の岸を出て菩提の海ふうかふとゟゟ弓折ふやいひ出けん敵陣ちらく漕ふせく掉さーとむきは堤の上ふ立出て清水ゟ自害ヒるとや

我も見ん彼も見ふやと居らひたり宗治ヒこーも臆ヒる色形くヒんと立て一禮ーいて最後の一曲かふてんと力を抜くさーかさー最清氣ふる聲をあげ河船をそめくあふとの浪扰浮世の夢を見習ヒーの驚かぬ身者ヒかぬきとうたふ聲の下より腹十文字ふかき切けれハ郎等の高市允太刀を振上るゟと見れハヒや首ヒ前ふヒ落ふけり月清入道これを見く道のへの清水流ゟく柳蔭ふヒーゟ程の世間ふ心ヒむる者愚ゟ形るゟと聲いとおかーくうたひつゞ續いて腹をヒ切たりけり末近左衛門是をヒて舟板ふ丁と蹈ふらー敵と見ヒーハ群居るかもめ関の聲と聞ヒーハ浦風ふりけり高松の朝の露とヒ消ふけるとヒこし

末をうたひかへ腹かき切北枕よせふしたりける相従ふ
ものふハ難波傳兵衛白井與三左衛門草履取の七郎次郎い
つれも潔く自害しけるを高市允六人の死骸を取納め筑
前守より出されし検使堀尾茂助ふ向ひ悉く姓名の礼を
付てこれを渡し其後已も腹切こつから喉を押切てそふ
したりけり数万の軍兵これを見てあれ大剛の者やと
感ずる聲ぞしハ鳴もやまさりけり

流布本ふ清水長左衛門より蜂須賀彦右衛門杉原七郎
左衛門へ宛る状あり其文中ふ清水兄弟難波傳兵衛近
松左衛門衆命ふかゑり切腹と見ゆ宗治をしめより月
清入道末近左衛門を伴ふ意ふし難波傳兵衛ハ家臣ふ

ゆ近松左衛門ハ末近の誤也かつ末近を難波の下ふ列
ねへきにあらゑ因て此状偽ふるゑを知故ふ是を削る
且六月三日の状ふして四日を自殺の日とゑ是まさ誤
ふり三日長谷川宗仁の飛脚秀吉の陣ふいたり宗仁の
状を出ゑ秀吉此状をよゑ終るやいなや其飛脚を斬ゑ
そらくして仙石權兵衛あやしき農夫一人めし捕きさ
るこれを改むゑハゑきさしの身鞘より三分ゑとゑ
かし依てさやを割て見るふゑたして書状ありひらき
て見りゝ其者をよく調ふれゑ明智ゆ家人藤田傳八也
一書ふ傳秀吉まゝ是を切然して後ゑりあふ其状を讀
藏ともこれ光秀毛利と牒し合をて秀吉をうりへとゝふ状

ゐる其後秀吉朝炊を喫し畢て枕ふつき四日早朝ふ
いたりて目をさまし堤を巡見して安國寺恵瓊ふ面會
し舊を語り終ふ和議を講そしめけるふ吉川小早川兵
ふ筑前守兵多く近日信長の加勢も來著といふ時ハ勝
ハ筑前守ふあり毛利ハ兵寡く氣つかれたり負んと論
ふ及そ然ふ筑前守より和講を入るゝと不審ゐりさ
れとも高松の城誠ふ危ふし高松の堤を切て和をんと
云筑前守安國寺をして清水ふ説しむ清水まさ吉川小
早川のため自殺せんと云依て五日宗治より自害し
て籠城の兵を助命をんとを請秀吉これをゆるしかり
酒肴を送る六日宗治そふそち舩ふさふさし秀吉の陣

ちかく漕よせて自殺ス月清以下ハ宗治の志を感して
殉そるのミ元より秀吉の獲んとを欲そるも宗治一人
ふありいそんや難波傳兵衛の如き決して秀吉の欲そ
る處ふあらス即日堤を切て城中の沈没をそくひ七日
毛利の両川へあてゝ筑前守牛王のうらふ大小神祇を
のせて盟文を書小指の血をそゝき安國寺の目前ふて
判形を居秀吉の心中かくの如し斯上猶疑心あらハカ
ゐし若別条ゐくハ和僧両川の誓書をもち來れと宣へ
ハ安國寺そと歸り秀吉の判形を見をやりて両川の盟
書を請取秀吉の陣へ來りこれを渡しそかハ秀吉即刻
播磨路さしてのかられけるかハ日ふ姫路ふ著し九日

一日休息（やすむ）ー十日小上方へむかひ十二日天神馬場（ばば）ゟ着（つく）
十三日山崎合戰（かつせん）ゟ

重修眞書太閤記六編卷之廿七終

400 6